

京都ゆかりのキクタニギク（菊溪菊）をご存じですか？

京都御苑内特別展示 期間 2020年11月21日～12月1日

(公財)京都市都市緑化協会・(一財)国民公園協会 協力 KESエコロジカルネットワーク

1. キクタニギク（菊溪菊）とは？

京都・東山を流れ下る菊溪（菊谷川）に自生していたことが和名の由来です。しかし残念ながら東山一帯では絶滅しました。最晩秋に、黄色い小さな花を数多くつけ、アワコガネギクの別名があります。

環境省レッドリスト（2014） 準絶滅危惧（NT）
京都府レッドデータブック（2015） 絶滅危惧種

- 学名 *Chrysanthemum seticuspe* (広義)、~ *f. boreale* (狭義)
- 草丈60~90cm程度、大きなものは1.5mになる。茎は盛んに分枝する。
- 葉質は薄く、長卵形で深く5裂し、互生する。ふちに鋸（きょ）歯、両面に細毛があり、明るい色。若い葉にはさわやかな芳香がある。
- 10月下旬~11月頃（関西地方）、栽培ギクに似た1.5cm前後の多数の黄色の頭花をつける。



キクタニギク（栽培個体）の葉（左）と頭花（右）



京都市内自生地で（2004年）
乙訓の自然を守る会提供

■分布、生育環境

本州・九州・四国の一部の府県、朝鮮半島、中国（北部・東北部）に分布。やや乾いた岸や山麓の土手などに生えます。（国内では一部の府県で1990代に外来キクタニギクの繁殖が確認され、交雑の危険性が指摘されています。）

■生活での利用

花や若い葉に良い香りがあり、香料や薬用（民間薬）、食用ともなりました。

香料

花は菊らしい香りがあり、精油を採って香料にした。

民間薬

油漬けにして、傷薬にしたので、アブラギクの別名も。

食用

葉や花は、天ぷらなどにして食べられた。

■栽培と鑑賞

キクタニギクは京都では時に栽培もされ、また、かつて江戸で栽培されていたとされる「カモメギク」という栽培品種（現在は東京の皇居にのみ現存）があったように、鑑賞の価値もありました。

■キク属のモデル植物

栽培ギク（イエギク）を含む広義キク属の遺伝学的研究のモデル植物として、近年、注目されています。（広島大学理学研究科附属植物遺伝子保管実験施設を中心とするナショナルバイオリソースプロジェクト「NBRP広義キク属」）

2. 「菊溪」の歴史と今

キクタニ（ダニ）は、菊溪、菊谷、菊澗と表記。下流は、菊溪（谷）川あるいは単に菊川などと呼ばれた。「將軍塚」付近から流れ出て、鴨川に注ぐ。

江戸時代は高台寺から建仁寺を流れ、鴨川に注いでいた。東山区の地名「下河原町」はその河原があった名残。（花洛名勝図会）

寺社の盛衰、近現代の市街化、生活様式の変化などにより、東山と菊溪（川）周辺の環境は大きく変化してきた。

平安末期～鎌倉時代？

江戸時代

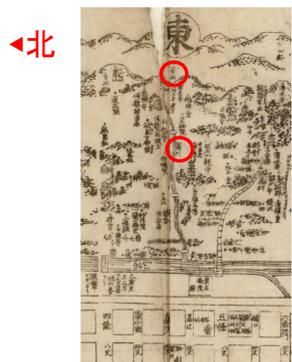
近代

現代

『花洛往古図』

1791（寛政3）年

制作された江戸後期からみて500年前の京都の様子を復元を試みたもの。「菊澗」「菊川」の地名が見える。



(国際日本文化研究センター所蔵)

『雍州府志』

1682（天和2）～86（貞享3）年頃
黒川道祐著

鷲峯山（高台寺）の項。山中に十の境有り。菊潭水、其の一なり。山中の溪間に菊多し。溪水其の間より出づ」とし、高台寺十境の一つ「菊潭水」を飲み長寿となった僧がいると伝える。

『元禄十四年實測大絵図』

(後補書題)

1701（元禄14）年

高台寺から出た菊澗川と見られる川が、清水寺方面からの轟川と見られる川と合流し、建仁寺境内を流れ、鴨川に注ぐ様子が描かれる。東山の斜面も、現代と異なり、よく利用されている。

『都林泉名勝図会』

1799（寛政11）年 秋里籬島著

双林寺長喜庵の項。頼山陽、田能村竹田、蛸崎波響など全国の文人も訪れる文化サロンだった塔頭。絵図には、住職の月峯菊澗の姿とともに、境内に菊溪の水が取り込まれ、流れている様子が描かれる。



(国際日本文化研究センター所蔵)

『花洛名勝図会』

1864（元治元）年 東山之部著
菊溪及び金玉山双林寺の項。高台寺十境の一つ菊潭水の源が菊溪であり、下河原に流れると述べる。本居宣長が訪れ詠んだ歌を紹介。

西行、頓阿などの事思ひ出られるにかたへ（傍）なる流れを菊の谷といふと聞きて
古の人に契りを結びみん
住みける跡ときくの谷水



(国際日本文化研究センター所蔵)

航空写真

1974年 国土地理院

市街化で下流の川はほぼ暗渠化されキク類が育つ河原はない。東山も明るい森林が失われ、照葉樹林化が進行している。



3. 保全・普及啓発活動

本来の自生地の大半が失われていることから、まず普及啓発活動として地域性種苗の生息域外保全を行い、さまざまな団体の協力のもと、自生地の再生への展開を図っています。

KESエコロジカルネットワーク

KES(京都環境マネジメントシステム・スタンダード)に登録する企業・団体がCSR活動として取り組む生物多様性プログラムで、キクタニギクを含む京都の希少植物11種の栽培に257の事業所(2020年度)が参加しています。

栽培株の一部は、キクタニギクの和名の由来となった東山の菊溪での植栽活動に活かされています(次項参照)。



栽培管理の講習会

■KESエコロジカルネットワーク構成団体

- 京のアジェンダ21フォーラム
- 特定非営利活動法人KES環境機構
- 公益財団法人京都市都市緑化協会
- 京都限リビル開発株式会社
- 京都市



植付の実習



事業所での栽培や啓発

京都伝統文化の森推進協議会

東山の国有林周辺の寺社、商店街、行政、学識者などをつくる協議会。「キクタニギクが咲く菊溪を復活させよう」と林相改善事業の一環として、森を暗くしているコジイ、アラカシなど高木の間伐や、常緑低木の除伐を2016年度から行っています。

こうして明るくなった菊溪に、毎年春先、市民も参加して、キクタニギクや落葉広葉樹などの地域性種苗を植えています。幾度かの台風の被害に遭いながらも、地道な活動が続けられています。

このとき植えられるキクタニギクの多くはKESエコロジカルネットワークからの提供です。



協議会メンバーや市民が参加する植栽活動(2017年3月4日)



キクタニギク周囲の除草・除伐作業(2019年11月6日)



植栽2年目の株(2019年11月6日)

(公財)京都市都市緑化協会・(一財)国民公園協会 協力 KESエコロジカルネットワーク